

ダルマキールティの pakṣābhāsa 説

——pratitinirākṛta の場合——

稲 見 正 浩

0. pakṣābhāsa (間違った主張, 似宗) という概念は, ディグナーガ (D) においてはじめて明確な形で pakṣa (主張, 宗) の定義に関連してうちだされ, 形式化されるものである。彼は *Pramāṇasamuccaya* および *vṛtti* (PS (V)) では四種, 『因明正理門論』 (NMu) では五種, pakṣābhāsa を列挙しているが, 本稿ではこのうちの śābdaprasiddha (言語知から知られるもの) によって否定されるものについて彼の後継者ダルマキールティ (Dh) の理解を検討する。

1. Dh の議論をみる前に D の説を一瞥する。śābdaprasiddha によって否定される pakṣābhāsa については PS V, NMu 両書とも同様な解説をしている。

不共 (asādhāraṇa) であるから推理がおこらないものに対して, 言語知から知られる相矛盾した意味内容によって否定がある時, それは pakṣa ではない。

例えば「月 (śaśin) は candra ではない。存在するから。」 (acandraḥ śaśi satvāt) という主張のように。 (PSV on PS. III 2b-d = NMu 大正 32, 1 19-20)¹⁾

この難解な説明だけからは D の意図は明確とはならないが, ここではこれまでの研究を代表するものとして北川秀則氏の理解を見ておこう²⁾。

北川氏は, まず, 次のように理解する。「懷兎 (śaśin) は candra ではない。存在するから。」 (A) という間違った主張を斥けるために対論者が「懷兎は candra である。存在するから。」 (B) と述べても, 懷兎以外に月はないのでこの推理 B には同品 (sapakṣa) が存在しない。従って, 不共であり, 推理がおこらない。

又, 北川氏は, 間違った主張である A が D の論理学では正しい推理となってしまうことを指摘する。懷兎以外に月はないので, 懷兎以外に非月性 (acandratva) を有しないものは存在せず, したがって, 推理 A には異品 (vipakṣa) が全く存在しない。そして, D の論理学では異品が全く存在しないものも因の第三相を満足すると考えられるので, この推論は正しい推論となってしまう。そして, このような D の論理学の不完全さから生じるパラドックスを処理するものとして, この śābdaprasiddha による否定, ひいては pakṣābhāsa という概念が導入されている, という結論を導きだしている。

この北川氏の理解はこれまで学界の支持を得てきたものである³⁾。しかし、結論を先取すれば、以下に見る Dh の理解とは少々趣を異にしている。

2. D の説くこの pakṣābhāsa について、Dh は *pramāṇavarttika* (PV) 第4章 109-130 で解説する。彼は他に *Pramāṇavinīścaya* 第3章や *Nyāyabīdū* (NB) 第3章でも解説するが、今回は PV. IV に基づいて彼の説を検討する⁴⁾。

別稿⁵⁾で示したように、Dh は D の説く pakṣābhāsa を 1) *pratyakṣa* に否定されるものと 2) *anumāna* に否定されるものの二つに再編成する。当該の *śābdaprasiddha* に否定されるものは 2) に含まれるもの、しかも、*svabhāvahetu* のものとみなされる。これは「通念 (*jagatsthiti*) によって否定されるもの」や「観念によって否定されるもの」(*pratitirākṛta*) 等と呼ばれるが、本稿では *pratitirākṛta* と統一して呼ぶことにする。

2.1. まず Dh の理解するこの pakṣābhāsa の意味を見てみよう。

Dh はこの pakṣābhāsa を言葉の指示対象の問題としてとらえている。つまり、話者の意図した語の指示対象であること (*iṣṭaśābdabhidheyatva*)、又は語の適合性 (*yogyatā* 指示可能性) はいかなるものに対しても否定されず、このことを認めないものが反証されるのがこの pakṣābhāsa であると述べている。彼は D の言う “*śābdaprasiddha*” を「言語活動から生じる *dharma*」と理解し、それを *iṣṭaśābdabhidheyatva* 又は *yogyatā* とパラフレイズする。(PV. IV. 109-110, 113) 彼によれば、言葉の使用は言語契約 (*saṃketa, samaya*) にもとづき、その言語契約は話者の意図 (*icchā*) のみに基づく。従って、言葉の *yogyatā* はいかなるものに対しても否定されない。(PV. IV. 116) つまり、*icchā* のみに基づくものだから、言葉自体には意味の制限は全くなく、すべてのものが表示対象として妥当すると考えられる。(PV. IV. 111, 125) そして、このような言葉の *yogyatā* を否定するとき、その *yogyatā* によって反証がある。(PV. IV. 112, 127)

例にあてはめて考えてみよう。D の述べる “*acandraḥ śāśi sattvāt*” という例を Dh は「月は “*candra*” という語で呼ばれない。存在するから。」という意味に理解する。そして、先の理論によると、すべてのものが言葉の表示対象として妥当するので、この主張は “*candra*” という語の *yogyatā* によって否定されることになる。以上が Dh の理解する *pratitirākṛta* の意味である。

このような理解の背景に Dh は言語理論が存在していることは言うまでもない。同様の理論は PVSV 等でも説かれている⁶⁾。

2.2. 次に、D の「不共であるから推理がおこらない」という言明に対する Dh

の解釈を見てみよう。この文は二通りに解釈される。

① まず、以上のような言語理論に基づく“candra”という語で呼ばれないものは全く存在しないので、「月は“candra”と呼ばれない。存在するから。」(A)という推論には同品は全く存在しない。従って、証因は不共となり推理は成立しなくなる。(PV. IV. 114-115) この場合の推理とは実在によって引き起こされる推理 vastubalapraṇvṛttānumāna のことである。A が主張された場合、それは推理の対象にはならず、推理とは別の pratīti によって反証が起こることになる。「存在するから」と最も大きな概念を証因にすることで、他のどんな証因をたててもこの推理は不共になるということを意図している。(PV. IV. 115)

又、この yogyatā を対象とする pratīti という知は推理知に含まれるものであるが、ここで明確に vastubalapraṇvṛttānumāna と区別されていることに注意したい。後者は実在 (vastu) を対象とするのに対し、前者は構想されたもの (kalpita) を対象とする。(PV. IV. 118-119) そして、当該の pakṣābhāsa はこの pratīti によって否定されるものである。

② もう一つの解釈は、相手の間違った主張を斥けるために「月は candra と呼ばれる。」(B) と述べても、相手は月が“candra”と呼ばれることも認めない以上“candra”と呼ばれるものを全く認めないことになるので、この B には同品が存在せず、従って不共になるというものである。(PV. IV. 120)

2.3. 以上が pratītinirākṛta に対する Dh の理解であるが、彼とは別の理解も存在していたらしい。この別の説は注釈者達によって、Nyāyamukhaṭīkākāra に帰せられている。それは「candra はこの世に1つしかなく、第2の candra はない。それ故に不共である。」というものである⁷⁾。Dh のような「言葉の yogyatā はいかなるものに対しても否定されない」ということは考えられていない。

この説を Dh は次のように批判する。まず、定義 (lakṣaṇa) である以上、別の例も遍満しなければならないが、「第2の candra はない」という説では pratītinirākṛta にはこの例しかないことになると指摘する。そして、Dh は「dhātṛī は“vṛkṣa”と呼ばれない。(avṛkṣo dhātṛī)」というのも pratītinirākṛta の例であると続けている。(PV. IV. 121)

又、「第2の candra はない」ということもないと Dh は指摘する。世間では樟腦 (karpūra) や銀 (rajata) などに対しても“candra”という語が用いられることが知られているので、これは不共とはならないと述べている。(PV. IV. 122)

更に、注釈者マノラタナンディンは、敵者の説で考えてもこれは不共にはな

らず、むしろ正しい推論になってしまうと指摘する。敵者の言うように第2の candra がないとすると、推論 A には瓶などの同品は存在するが、異品は全く存在しない。そして、異品自体が全くないものも第三相を満足すると考えられるので、この推論は正しい推論となり、不共ということには全くなならないはずである。(PV-Vṛtti on PV. IV. 120)

ここまで見てくるとこの Nyāyamukhaṭīkākāra の説は北川氏に代表されるような従来の見解と類似していることに気付く。既にみたように、北川氏は candra は śāsin 以外にはないという見方に基づいて自説を展開している。しかし、今の Dh の解釈を見る限り、この様な理解は不可能である。

Dh の理解によれば、この pratītinirākṛta は、「言葉の yogyatā は否定できず、いかなるものも言葉の対象となりうる」という言語理論の上に成りたつものである。従って、推理の場合も、同品が存在しないのであって、異品が存在しないのではない。まして、正しい推理になってしまうことは決してない。

3. 以上の様な Dh の理解は全面的に PSV の注釈者ジネーンドラブッディに引継がれている。又、NB-ṭīkā や Tattvasaṃgraha (-pañjikā) も同様である⁸⁾。Dh 以後の解説はすべて彼の説を受けているといっていよい。

ただし、必ずしもこの事実は D の真意がこの様なものであったということを示唆するとは言えないであろう。他のケースにも言えるが、Dh の理解をそのまま D 自身の説に当てはめることは危険である。むしろ、D の論理学の不完全さを Dh が彼なりの理解でもって解消させた結果と理解すべきかもしれない。

1) cf. Muni Jambūvijayajī, *Dvādaśaram Nayacakram*, part I. 1966, pp.129-130.

2) 北川秀則『インド古典論理学の研究 —陳那 (Dignāga) の体系—』(鈴木学術財団 1965. Repr. 臨川書店 1985.) pp.63-67, 130.

3) 桂 紹隆『因明正理門論研究 [一]』(『広島大学文学部紀要』第37号, 1977年) pp. 113-115. 等。

4) cf. Tadashi Tani, THE PROBLEM OF INTERPRETATION ON PRAMĀṆ-AVINIŚCAYA III AD VV. 26-27 —WITH THE TEXT AND A TRANSLATION— (『高知工業高等専門学校学術紀要』第28号, 1988年)。

5) 拙稿「仏教論理学における「間違った主張」」(『哲学』第40集, 1988年)。

6) cf. PVSV (Gnoli's ed.) 112, 19-22.

7) cf. PVP. D. 293a1-2, PVT. P.329b5-6, Vibhūti 455fn.1, PVV. on 120, 122.

8) cf. Jinendrabuddhi P.163a2-165a6, NB-ṭīkā (Malvania's ed.) on NB. III. 51, Tattvasaṃgraha (pañjikā) 1394-1395 (BBS).

〈キーワード〉 ダルマキールティ, *Pramāṇavarttika*, pakṣābhāsa, pratītinirākṛta (日本学術振興会特別研究員)